



鳳巾の晴

表合下

三



表合下

大垣

名物日純いえ福の尻うりさめ友のそ途を  
享保の末わらんそれいしとあまをい余り  
已とあつても年ぬういされあまをい母永  
年のまきまかたつて小き信ええ張紙  
進ふきめたるきよ舞葉流し源伯せんと  
こつたゆいよそ途のねを地地も地と  
そちうちうちうち日よ信をい和暖なる強り  
のまを祝いうちやゆくもて送りあふ  
四方のきよいよいいはなをい

あまい入るやわわの産よあれきあふ

あせ





其の二

そはくんあめくあんも

東孝

高き毎人の時をさよふあしよ

つよ

悟り九十年のあつ十年のあつ

あぢ

あつてよふあつてよふあつ

紀風

よきあつて勝るあつあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

其の三

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

あつてあつてあつてあつ

あつ

湯免とて豆名月の晴の如  
有流

おとこ交り此信世の中  
霍之

名録

春

是子とてささきもわかぬ  
冬怒

春風や干草あけせん  
史之

春雨やふちあけし  
波夕

さよらとておふても  
紫流

面影よりさよらとて  
指系

清の夢の何の夢か  
寛之

片乃此片くと水片く  
互又

よふとてさよらとて  
不千

甘美

ゆめとてさよらとて  
不中

春の夜稀を日  
笠吉

初陽や片の  
史之

揮なくわらう山とくわんをいし晴  
杜口

常いす月も泣きあふまほしき雲のれ  
骨索

さう布やこしよんせよ夕日と  
鳥六

林

ゆりゆりこり花うきまゆ花のれ  
伽丹

毎の朝も志川をよ日は影のや  
史院

幾人のよふききく水ておんをか  
不因

志川のさやあらし菊さうりまをば  
幽静

福堂のこころうこくは木の葉のれ  
紀風

夕

長繩よあぢるもろしのーいれ我  
霍之

花さくよや月夜新しうあはれ  
有流

おまひとまきそのまはまをいふ  
路小

枯らうし義よこもれぬ柳のれ  
不席

折しよまふしぬきく石花のれ  
周至

吹越——さみちのなげをよくり 風朝

同所

あま略

九南

長閑さや思ひやしくけり 流芳よと

けり 丁の霧ふも遊ひけり づよ

あしきうふちりといふと 十と子 冬怒

ゆこそれ花も宿もか胤の 何れ

あけろとも言うく言く 丸木橋 已曉

月とあしよちのあきぬれ 可玉

あふけく文を 霧く さま記 千斧

のりね なまふもほふし 東有

名録

双中下もけりも 指ふ桂ふ家 何狂

の川おちそり川 傾きさう 稚子の夢 東有

ぬれくと 寝も啼くく 巳早 已曉

標くよ 何氣れん 家神くとと 九南

草木のいれありし神をぬふあま  
山はうきふらもそふよふ  
可玉 千翁

日新

あまき

佳林

旅きもちや松のこもりのはらふ

そのたこふ 程いほき  
山

帛も貝も柴の籠らふこのよ  
丸窓

捨子うらうこくあうりとるこ  
金斗

月影のまをこふむて冷くと  
夏調

うらうらも林はあまき古歌も  
夏也

名録

うらうらも送あくとふちうら  
夏也

あふとらうたふめいむげん  
佳林

凍りけや下戸のまゝふらふ  
金斗

茶えうりのなもよらふささ  
夏調

同新武門



まがらうまう舞臺のり脚とまじわ

林のうらまゝ——由那のこゝろのあし 己百

畑の餘をこゝろのこゝろのこゝろ 己百

花をゆ 解るゝまゝの右ありて 己百

よこ折ぢのあさやうれ板 か年 己千

法下のるまくと陰るのさみこゝろ 己千

ひよんを囃せや風もかゝるよ 文斗

清原氏の市もこゝろの月あり 己千

ゆきまゝ——ときき草の穂 風氣

名塚

あふりし清り——こゝろや山はる 己百

まゝ——こゝろねあゝやまさくら 己百

ふよふ又ぬら——風中の風 己千

龍啼やまもけけの湯はる 文斗

汗うえるほとまき葉をうらまのむ 己千

岩も

水たの辰の凡志川を寄りたの

さしはり  
ちふれん

乙外

蒼くれた片をく の日和を

あふをいそよきさし中を種も 乙外

尾をいほ程葉の折の傍あけ 乙外

夕火上もれく川く 乙外

川伸あさりやまて 辰く の川片を 乙外

さふも力ふの裁許をく 乙外

宵月子扇つふいし林列水す 乙外

のこりぬ曇乃 打ちもよふ 乙外

名録

灌佛やそ川は方の子をたさ 乙外

家う耳のをとてそたふのちとさあ 乙外

流午りの枇杷の枝折提てん 乙外

涼一帯物去く紙を吹く 乙外

流るちよやま 乙外

ろあびりしきありぬ松川 杜峰  
 こくちや涼風子稼きとる 杜因  
 凡のきやを統く内子はの近し 李三  
 吾自や日くけのちんくもんを 右曲  
 誰く先へつてこもせよとまに 乙介

揖斐

目さぬーやそ途しむのあけられぬ  
こくちや涼風のきをこもてり出て  
魚目標

花さるるよふ二日夕のあけりて 梅溪  
 新所の若男こもて余はよるし 一因  
 月まへちんぬく津の候 以文  
 元くちにお中さくし藤月夜 加松  
 藤もあぢあぢふのあぢあぢ 子

石塚



とち〜。又掌の勢此 子

谷塚

去ちよ〜か免次性せん稚雛 玉葉  
 中月のぬよききし香く〜り梅のい 史芳  
 極ちりて落はきととの下木の花び 卜崇  
 春雨やさふあや〜入州のよ 孝東  
 咄〜つて〜る〜るやふふ山は〜 箕山  
 ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い 巴守

六ノ井

吾如房の房〜よそ途と〜あ〜ちりて

風和

何れや〜し揚げてんふくれ初ま〜存  
 旅のふ〜し〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
 あちやちちやと嫁入お侍 子葉  
 月し〜や〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し  
 来は〜る〜丁のあ〜し〜このは 子

名塚

藤入を 降しきまうら 初所雨 老柳  
 ありあふ 枝ぬりて せりみ 子葉  
 波の 岸を 跡あり 背たれ 佳し

中村

つ本少信をて送るりおてこのた乃

そあ〜ん 祝〜とぬく

うらふ〜 追〜よ 笑くむの 猿  
 一青

名塚

乙未 己未 ちう 只お 西程 洗古 要二  
 乙未 己未 ちう 只お 西程 洗古 要二  
 乙未 己未 ちう 只お 西程 洗古 要二  
 乙未 己未 ちう 只お 西程 洗古 要二

木斗もやうな座振く氣のまじり 一青  
 何とやらよあはれとねとせうふ 一の程  
 うわくしあうしやむいけつうり 要ニ  
 多水くうらやむおの信り ちの  
 康のまやとよふとよふと心 西宮也 只お  
 きのふくす指も透て後の月 立 己更  
 り林やうふふのゆれ棉をま 西宮 洗古

糸貫

如月の吉辰とあはれとそ違せぬ  
 心小房を

とあふんねとあや

相子

長きまのりし晴くし 揚書花  
 此山のまきん 海くぬい  
 晴くし如葱此書よあはれ  
 乃史一何角のゆと打あめ  
 祢るふ四符あて好いふんま  
 美たふし 四日 ぎふ十七日  
 楓橋

早稲のてん 居るは 月おの 名をきく川や 布由

ついでと 早稲のてん へん 子

名録

時とととあらしよふ ぬらぬらな	文川
ころちやとをそく日けの目さぬく	孝有
たし多ぬくおくくぬくやあひのい	麦と
ぬの日和はぬ晴さあふ 雑子のあ	布中
折てくくそくくくぬくぬくや梅ひ	おと

大教

おもて略

そのるれ 掃を前よる 色日和 和 鳥曉

あつむ 流れしりそく 高尾 づ平

指り 基よは 運の妙は ねまうめて 恭斗

け 噴の 噴を ちと ちと 高吾

洗ひ粉の 糲よ 湯なのおくさ ね せ 葉

あひ 谷のく川 意く ね 高 高 眠



晴るよりの月お 花陽

廣中り啼て 小窓

名塚

歌よ入まり 歌いさ後の月 序友

竹まき 何まよふよふの月 小窓

かきくさるのさなこそく 花陽

乳母よまて 瓶うけ 花陽

拾ふ知る 乳母うけ 鳥曉

新自のや 花と 上六九 花陽

娘とまのぬえて 花と 花陽

草狩や 花と 花陽

東海松

まはしよと 免長を 花陽

日と遊ぶて 白り 花陽

初く 乃小 花陽

さびし〜長閑なる名をききし  
帰夕

おろし〜水のせよ〜  
おぼ

をよ〜居たの〜  
青葉

穂あ〜  
青楓

名録

梅木〜  
青蘭

あは〜  
花露

白足〜  
乃紅

む〜  
青楓

ま〜  
後代

あ〜  
夜夕

あ〜  
李仙

大牧

あ〜火の〜

〜  
〜

その日〜  
名録

山崎のちりしめきしはのこむ  
 山崎  
 うらうれ教く猿好と恥ぢかて  
 凡之  
 如意よりあつたはるはるや  
 仙陸  
 くもつては懸ては月ひ月ぢらん  
 可変  
 可なりあつてやう懸のさるは  
 里石  
 名塚

藤のむやまは仙てはるはるは  
 凡之  
 牛ひとては藤をてはるはるは  
 仙陸

垢はぬ際ふてふし 又言 里石  
 我はふり氣をひりしはるはるは 可変  
 卯のむやまは仙てはるはるは 呂奎  
 平尾

二月に臨み候と名と旅を極く  
 乙和  
 其の言はふしはるはるは 山崎

掛ヶくお梅も彼等の踏歌一 其鳩

迹り少あうくく 云 新あうり 其来

弓まおとせ帯一よふのさうり口 其来

其子の住まそのほくさあんとす 踏和

沈まうし序も小月のみさあり 踏夕

防ちあふふ子のあゝ踏子回 其

名歌

ほ乳まゝの子七あうりまのぬ 其来

長閑さや小僧は水そのお托祈 其来

ぬり神子揃水こゝろのさあふ 踏和

わじやそそをふの 人通し 其鳩

さあを沈まゆあふ月 其和

延るるまのせり一柳の如 踏夕

表伝

に流の境もそそふとふきる井  
園うあふのあうりま

江梅や是くうふきの暗の以之

如氷のー一はまうえの杖 山

小僧の何のきとむしよと列の 吟

よふの梅の梅のきせ 園路

ちくくとねふるのちぬの月影 松下

七夕の梅の梅のきせ 菅

名歌

うそふその氣のきせは不破の月 水

林のきせ無のー無くはふき 松下

乃のきせ無の乃のきせ 園路

そのきせのきせの 以之

善空や月よきせの 善

山井

晴のーよきせのきせ

流丸

折のきせ梅のきせのきせ

造化はく梅のきせのきせ 山

胡葱とよむいゝ字音の思慮して 田抄斗

毒いゝ山と鳥とよむまね 杜柳

かぶくくと早より乳のまね月の影 龍背

ねし杜とよむまねの柳川 子

各派

稚子啼くや音なく寝てまねられ 田抄斗

凍露や片所いまゝのまねのまね 杜柳

ゆき梅やまゝとていり人のあり 流左

雪乃ちまよと音と音起しきり 龍背

関ヶ原

先例に效つる音ねと考へて

かよゆゑその途のまねそ友古川 巴人

水よ日影もまねあるに 山小

経計子象の衣音とりのまね <sup>イハテ</sup> 筆狂

月よりの音ねとまねわく 龍夕

新雪とよむまね月よまねいゝまね 出南

ついで初めたるそは松白し 子

名塚

鶴も内てあそひくまの魚 幽甫

うぐいさもかゝる毎日の初まふ女 聖夕

唯静りをきくうきとのくまふふ 巳人

近江

栢原

古翁の流氷をくまふて流氷の方へ  
流氷をくまふ流氷といふ歌こそあ  
るの流氷をくまふ

ゆーか〜ん〜もま〜の山路〜 巴流

その新法師と志きふ水よ日 山白

平言んを神も佛もうら〜のよ 藍氷

くん世はふ〜先 繩も石垣 不を

似〜教のり〜やと園の観〜後 トあ

ま中の月のまんと申〜 松る

実く松子比つたく草の音えり

柗水

己やくきりりの柗とてな

子な

名録

赤のうりこまをいさあさる紅まゆ

柳水

虫のまやちうたを心て歌く

菖水

林のまやちうたを心て歌く

ト水

康のまやちうたのまも細く

呼友

うそまをいさる氣とをりて

松水

名月や産もまの志とく

不立

翁うはちうたのあなよ

素歌

秋もまてや片とる乃ま

奇歌

おぬいあも種を月不破の月

家歌

よおちく跡もやのり

巴流

余のまを押しまも菊の住居

如柳

多賀神法集



瓶の中のそととをいひ先とて  
多かたはたや一はよそめて  
ちよと旅の思をよると新

第ちよよお子旅の思をよると新

湖東の湖

濃陽ちよよとて旅の思をよると  
多かたはたや一はよそめて  
ちよと旅の思をよると新

その枝よとて旅の思をよると新

知水

ちよとて旅の思をよると新

機よとて旅の思をよると新

傍よとて旅の思をよると新

よとて旅の思をよると新

ちよとて旅の思をよると新

名源

そよとて旅の思をよると新

こちよとて旅の思をよると新

五月をきりくればおとよの月 乙節

祇小敷よ小鳥集もふいほりまゝ 分替

あふて山のやうきこゝに花の月 知有

工藤廣一

まぢくお申下候所おのこゝ趣し

いふまゝ

御茶の初よりよき道とて

孤舟

はくしつを丁より先へまゝとて

いふまゝ 祇小敷もあはれ山 乙節

うねりの水意よふ草のあひかり 孝仙

谷稼

はくしつを山出へぬらへ春の雨 孤舟

治陽

まぢくお申下候所おのこゝ趣し

神くはくしつを山出へぬらへ春の雨 許白

あふて山のやうきこゝに花の月 乙節

今の昔の飲酒の仕法は長宗とて 鳥文

仲々おふの燈臺の火は 也好

つゝあふえくちふとる支の影 札翁

つし機あひひい五乃不 佳狂

つしおのけりお月のおくり 子風

稲のつゝおこれおれし外し白 文雅

名歌

こけりおのけりお重おちるこ山 檜 鳥文

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 文雅

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 札翁

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 佳狂

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 子風

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 文雅

後ふ

おけりおのけりお重おちるこ山 檜 文雅

長閑なる夜も月の翹りし  
 隙も風の中なるものさしげよ  
 津一七何そ角そのおぬい  
 京の青れ膝ふあしちほと  
 文のふ文の夢よぬ心中  
 山と水ふまへ冷たくも益の月  
 雲の層掃くそぬや

其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系

名詠

お護の清き物ちん山はく  
 枕山や笑ふ木も葉もあしほ  
 うさよその初きすく山はく  
 子梅や此中りおの佳きよと  
 おのつちよのあしほくぬい  
 藤の角やさふあしほくぬい  
 ぬきくの中よあしほくぬい

其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系  
 其系

上己

三行一ふふくし葉露をそ途して  
馬鹿の近江の宮よりこぼし  
ありふやふく流せしる一先なる日  
信よりなるにゆきよりあつたの信を  
けつる一あつてききしふの信その  
まきくしふてす自在なまあり

離一ちぢ

ふくくくくくくくくくく

三

経廻之部 追ふ出来  
必録之部 同断

安永六年九月

蕉州書林

京寺町二条下止所

栞屋治三浦梓

